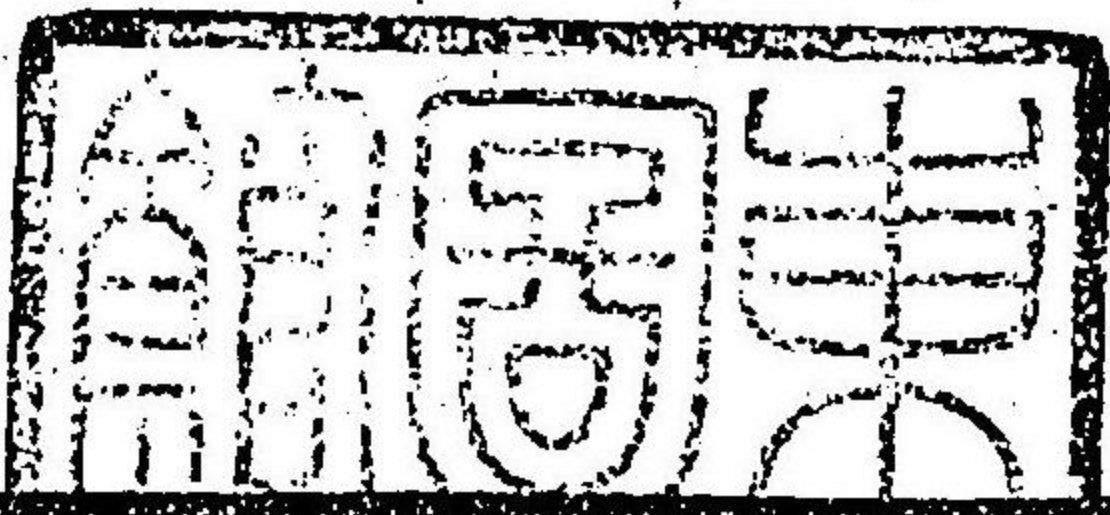


よみかたのた

七

139
8
139

| | | | | |
|-----------|---|---|---|-----|
| 東 京 図 書 館 | | | | |
| 冊 | 號 | 架 | 函 | 類 |
| 八 | 九 | 九 | 三 | 和書門 |



世にひつめをたて七

長阿含經小説の世尊毗耶離城に夏安居しおはす守戒めも

者にはあみりしる小僧はひつめに世尊たたまふ阿は

修し多之修り多に修り常に念じて忘れざる者は

思は心たすくして一切を捨てて死なばこそは佛の子

是小僧のまは今一切の後まで世よとあめり人たれは

安んずることをほせり先んとかう告よせの阿難を若魔

心懐々としてそれ佛を愛悟りぬははれぬは

てはあまの心をもたせり二及三及すはごとく若の世の

もたか答あめり世をたて次に阿難とあめり時をたて

告げたまふとす始て此の地を城なるをさめりてさめりて
を祀て去るをこれより秋之れ冬に成はるに小魔波旬来り
て世を今ハ此を此の何れを成にをさめりておぼすこと
とすまはすとすや般涅槃志のつとと信に奉依此時世を
釈家今涅槃をとす自ら時を急と答はるる波旬又白
すむむり世を始て道を成じりて時家涅槃たすふ成と
すめずればはまじり七原なるに成るる魔を成るを
とめりてすれ其時ハ涅槃とすれとすれ今其こと皆成
物ハ涅槃おもふ命をさめりて成るる魔を成るる波旬
とすれ波旬白く世を今ハ波旬佛みりり時をさめり

一 世ハ八位にほれり三月の後本生処拘尸那城沙羅雙樹の間
中滅夜をとす一 空告せざる小魔王とすりておとす佛を
去りて身をかろて去る去るはそれより遮はる塔小なりま
一 定意三昧に入命を捨り命をさめり世を大光の光を
おもひて黒暗は成りて照するまで何ひん事とす此の大地
こと此の震動人みをおとす身のをたちあひりて何れも
あんと思ひおとす阿難者此相をたおとす思れりて世を
此の地をさめりては是を祀てやめりて地はさめりてさめり
何の因縁おもてかたはるる地はさめりて地ハ

水柱たけり多は風空とまり風空にとまは空中大い風あり
ありてみづり起れば大水いさま地あまひのみ多動之是を先と
才一得道比丘比丘尼あり又大神天ありて見づら力をあ
見ん空おまひ水性を觀す事こと多之地性を觀す事ことす
まは地あまひの動之才三あり菩薩ありて神を母胎に下
まふ時地大いふとく才四は菩薩右脇より生あ時才五はが
さし始て正覺を成す時と才六あり始て法輪を轉す時と
才七あり佛教をたるとして性命を捨せんと欲す時と地
あまぬ之動之才八あり如来無縁涅槃界あり涅槃界せん
すは時地大い震動すとかう空をさかんとせり阿難者にか

せて現在比丘尼を香塔にありめはせりあまひの動之
今はく世なりおろまはるる三月の後般涅槃ありと
此みことおもはるる諸の比丘みなるは事とははるるにおぼ
に涅槃をさるるはあまひの世尊あり何ごとみせし
ハ世間小老なりおろまはるる天を利せさせり
みまはるる今二月三月に滅度するは
おぼしきものを思ひ乃外なる佛勅小しれは心されま
ごともおぼえ給は地小身を形を夢を河を母とて滅度の
まははるるをさるるおろまはるるたかくおぼしき
これを見せしとせり比丘尼小告させりみなるはな

いままそ天地人物ごとくなすべしは法も法も強らざる者ありて世間
有為法は法のそとぬことを信ぜざるもも亦たつともち何んかきことに
あはれはるに天魔彼向法まふ来り涅槃を信ぜざるもも亦たつともち何んかきことに
五今より三月は後般涅槃一もぶべしとやうにせざるもも亦たつともち何んかきことに
あはれはるに天魔彼向法まふ来り涅槃を信ぜざるもも亦たつともち何んかきことに
合掌して佛小むらひ唯然とせざるもも亦たつともち何んかきことに
とこまり住むし世にのみ小暗をばせざるもも亦たつともち何んかきことに
諸はあはせざるもも亦たつともち何んかきことに
三度法にまひるもも亦たつともち何んかきことに
神足才たに多くあはれしよひもも亦たつともち何んかきことに

世小住し強とんとおぼせば法心はまふなりと一切有餘世間小住
しよとぞ法鏡益多之人天安果をばせんと二夜三夜告せせむ
ひ時點して勸誘しまひるえはらるるは阿難のほやまらふとあ
や今世も才たに性命を捨しをたせざるもも亦たつともち何んかきことに
とこま世もとまもせざるもも亦たつともち何んかきことに
はこれをもも強とつらひ何んかきこととせざるもも亦たつともち何んかきことに
先何んかきこととせざるもも亦たつともち何んかきことに
後先もおがえはせざるもも亦たつともち何んかきことに
世尊法面のよりの法くは法ををたせざるもも亦たつともち何んかきことに
界より十方六趣の危生まで救護しよひもも亦たつともち何んかきことに

一 衆とて毛煩惱もおぼつるに消れおぼゆる大般涅槃經に佛拘尸那
城力士生地阿夷羅跋提何れはとらなるはは羅雙樹の間におりま
八十億百千人お大比丘尼前後をうまひのこみまあるは二月十五
日衆の時おれおせし神力をえて大音聲を出し上有頂までもそ
れ音をまひてあまひく衆生に告げせし一切衆生は歸依すは處と
至かる衆生は阿耨多羅三藐三菩提を成ずるは子羅羅羅小ことなるは
なまの如來應供正徧知大覺世尊今涅槃に入るとおぼす一
切衆生も一うたがうはあはれ今悉く回向しとこれ最後のひと
すとすまひてせしれおよびてみる佛乃涅槃のふべきをまひて
松阿をてりおみなる大地おんか大海もなる悉くうたがうと

阿かともあはれ人の乃涅槃をともせし勸請してなると世におりませ
せらんと拘尸那城小のまきまうとぬる者摩訶迦梅延等れまらくの
大弟子を佛光まあひし身ふるむ日形かまをを阿けてなま
この形にのみおのれ教りまらるる比丘尼阿か比大阿羅漢小く
威徳大徳王れやおははれおぼく朝日おははるるにかりせし
定解に阿ひ身おもらるるてとらるるはうなるみちおとをさるる
一いおせしおもらるるに指しめる又位十地等の無量乃大菩薩と
まうて阿らまらるる此菩薩夢圓せしは阿を祀し百千市め
至りて座おはするまらるるは優婆塞優婆塞毗舍離城を
諸の離車等阿浮提はらるるはゆき法王とれまらるる

たまやん阿闍世王とそたま人のことんえあそは阿つとあは長
 者居士少乃ころ阿の王孫あふ者まうでぎねあはる今をりあ
 少は心もをけらうもひ志をつく可供養とそ今までふあはる
 事おもひやぶく又諸の天王諸天女四天王等法施鬼神金翅鳥乾
 闥婆緊那羅摩睺羅伽那どのそは類々乃むがかりまうで阿つまの供
 養一も供養をなめらる後もたふなまきことなうたや此時ふありて
 少は羅刹とららに人をとそは其形凡小なきも世そは神力をりうふ
 了してのみそ悉く端に樹林神王持咒王會名は鬼魅天はをりくの
 婦女を後くは鬼王天地の中乃神とみる集る金阿つまりて風神は樹上
 形の時善を吹て雙樹の間にあしし雲雨の神を世も但槃一ははは

れ雨をそそいで流焚此火を消一まらんとおかし香自家王は妙蓮
 華をぬきともあまらして供養一まら獅子獸王又まらこれ乳身王鳥
 鷹乳身鳥乳雀迦陵頻伽鳥者宴身形とそあみあらるこの花はを
 之とて持来り水半牛王は来りて妙香乳をいへ供養はこれ乳物戸
 那城小ながらそそ阿の由起みそたまらぬままでおれは香あがりん
 を具是才四天下中の諸神仙人を世小めづくかうたき花阿まき
 此花を供養一蜂王はいろこの花をとてまうで供養守毎量世界
 此中間の神又阿の由山一の神大海神もあらは河乃神たまうと海供
 養世小こと形は蒼波婆羅門をとり尼連河の散佛是を社一面よ
 住す此時小物戸那城は安羅雙樹林多のそとてまらう白鶴はやに成

ぬわくは自慈小七室於堂閣阿くくは流泉浴池を多しき浴
処ゆその中に妙蓮華阿ゆをせんごころありて妙小女も持たまぬさ満
は初利天乃歡歡園たごころ一切人天阿修羅等あひごころ如来涅槃
於相をえんむかひ形一びのあふにこころは此の妙小女ありて四天王および
三十三天より亦六天まで天冠前ふまさりて更小供養をまう
ある大梵天王亦於余の梵天を身乃光昭をえんむかひ亦其光四
天下にほまひ一欲界人天たのん月日たひりてその光昭もかきあはれ
あふそれだの移此室の幢幡を供養あり其の中にみかかひにおも上
は梵宮にけられたはがすそを妙女羅雙樹乃尚小初終ぐるはく
おほはして佛を祀たご終のそへは如来阿をまんてわれらが最後

此供養をくする下と終つて世の女世を去る時を去る時を去る時を去る時
は毗摩質多羅阿修羅王無量其眷屬と共に詣すといふ乃
室幢をもてすそ乃蓋たひりてよもた千世界を覆上妙の其膳を
もてはくさいは欲界に魔王波旬そ乃きん天の妹女阿修羅
と共に地獄門を起す清浄なるをを施して若てよ女等のうちに
おほやと善根たすむかひ今もくく如来功徳を念う
妙妙妙の長夜の安楽を何んぬると又地獄中の刀剣を以て
若毒のたうなるは火燄には雨をそくたてこれを滅せしむ又佛の
神力もあてかたもくはけんごころもみる刀剣弓矛弩稍長鉤闘
輪羅索なごをすのほは彼を殺す供養一切人天にすむてその

中蓋此の如く中子界を覆み各佛を祀へてきて象
 等が最後共供養をうせしめよと教へたる三尊法すれども世
 尊うけさせぬは波旬わがねがひ故に心あきらめてさあぞき
 一面小あり大自在天王も無量无边の眷屬又たらんく乃天衆と
 表にまうせぬは此れまうけるは供具何の由か今八那れ供養の
 覆梵天帝釈教まうせぬは供養もたは珂貝たつことら墨を
 阿のめたるは供養に供養も宝蓋の中にてことらあちり
 三千大千世界をおほふことて佛を祀へぬはあやうなる
 無數のなりぬは此土より東方無數阿僧祇恒河沙微塵
 のあちりに佛世界あり意樂養育といふことには佛ありま

空等如来とて奉法十号具足一の乃世より一は太子子
 無邊身菩薩も告しせる今西方は安波世界に釈迦牟尼如來
 此佛もとに好むは乃佛ちりてわがに般涅槃しよせん世界の
 香飯をもてはうたが世に奉養すべしそれを合しをを
 般涅槃にいひよせん勅しよ死辺身菩薩佛の法をう
 せが佛を祀へて乃佛國を出て此の安波世界におけしはすか
 一ことら此土までの間此三子大千世界大地は種もはうご
 進よるもて梵釈四王も魔王波旬も摩醯首羅たもたつて
 此地に動すは小おどる身もあはるかたに又身乃光也を
 それををりしは何ごとらすとなんとなんをいふてら

げんとおほすころ時文殊師利菩薩座より起大願小告めよるなる
お世尊の心形を造りてこれより東にゆく每量阿僧祇恒河沙微塵等
此世界にありては佛ありまた虚空等如来と力奉侍十号具
足したまふがこふ菩薩は無辺身といふが乃菩薩教のなり
まほしの衆と共に如来を供養せんとしてにまゐりまゐりて
多の菩薩は威徳力ありて此諸天などの定ぬり阿耨多
が羅三藐三菩提を證するが時大衆を侍のなり東に淨土にお
りま守佛をん世尊におまゐりてこの形を鏡におむりておほすを
ん經よりそをりまぬりけあ又死辺身ばこのをん奉るふ一
た色よりおのく一乃大蓮華をばさるゝる其蓮華は上のにおのく

七弟八子は城邑ありのみを七宝に雜廁國なる其中乃衆生を
毎上大乘の夢をまゐりて余乃こそをまゐりて大乘に強典を書
けし續福可かて毎辺身菩薩はうでおほしまたおほはるの
の身身れおほひは無辺身なればまゐりて安んず虚空に在り
てしてたゞ諸佛をみんぬのの菩薩羅漢などもおほひて
のや佛足を踏首し合掌して白りてたゞ佛の心はあはれん
ておほひて食をうけさせると世尊の時を志すもてうをばたまは
南の西方に諸佛世界あり又无量乃毎辺身菩薩ありはるる
まゐりてあまおほひてはあり十方の微塵世界はるくの天か
悉集會し終ふ此時は女羅刹樹吉祥福地從廣三十二由旬は間大

空より地上より大窟より出て微塵をふるすまの如くその時
小世尊神力によりてけ三千大千世界大地を柔輦して窟室を
巖一西方无量壽佛におはす壽極楽世界のところへ又けの光
乃の鏡小むりておれが姿をえはがごとく小十方微塵を乃
諸佛世界をえはがはて世尊の面より五色の光をいづるま
此光のみてりかやきく諸乃大舎れ光明をいづるにむりけ
光明の如き十方をてしをえりて佛ありて佛ありて佛ありて
天阿修羅等と光明の如きに入るをえはが皆是れ佛てり如
來さき小もたむりてり一光明の今佛にりてりてりてりてり
十方にわけて所作すに辨をえりてりてりてりてりてりてり
相

らんいのおもて世にりてりてりてりてりてりてりてりてり
をき奉りてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
婆塞あり拘尸那城の中の五王子ありてりてりてりてりてり
座よりわたるかの如くありてりてりてりてりてりてりてり
終には世尊の如くありてりてりてりてりてりてりてりてり
うをばはる人むれ等今より依処なりたまうりてりてりてり
侍らんやれりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
後にて爾來乃今を求めんとおもひ侍ありてりてりてりてり
供をばはるれりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
甘修せりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

百済一は芽を生せしめて後れ貧窮をたらしむ檀波羅蜜を具
足せしむべし空かき言はせぬをきく大原隨部一夢をあげてよ
いさく希有なり純陀世の最後れ供養をうせしめよ純陀の言
は佛子なりとはむ世尊又純陀小告の言佛よび大衆小告持す
依は今もた時なり如来今日殺涅槃すべしとて三夜までたすま
純陀佛語をうけしめしめを承てたきりし大原小守お
れ世もた涅槃をたしめんとおきしめ集りし一切の舎
も共小五体を地に投し同夢に世も殺涅槃しむとてしめ
すもきしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
きて世もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ

おきしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
形もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
世もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
は常恒乃法不変異は法毎為の法もておきしめしめしめしめしめ
死もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
かたけしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
身法如来方便して涅槃を示現しめしめしめしめしめしめしめしめ
かといひて此涅槃をたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
實に有為の法もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ
たしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ

方便涅槃を志す一切諸法はみるこれ如幻乃相なり如來その中に
有りて方便力をもちて深著す深著す深著すといふとあれは諸佛の法
志の如し純陀見れば生死の如しを後にせんとおもひがゆゑ
に今此供養をうさむ諸の人天最後におまを供養す深著の
ハみる悉く不動果報を得ては身に安んずるをうさむてはゆゑ
に今此供養をうさむ深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
為し良福田とすらんやとおもはるす深著の如し深著の如し深著の如し
告はせむは深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
ち純陀此身を照しお純陀の如し深著の如し深著の如し深著の如し
屬中ともし深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し

一なるが如しはに之は又おもふはの如し深著の如し深著の如し深著の如し
重たごとの如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
終ど今文殊師利法王子等が如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
共にありて深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
具戒をうけし深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
をかうふ深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
おの如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
愍して今一切乃問世に住せば深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し
かに奉施して最後は檀波羅蜜を具足すべし深著の如し深著の如し深著の如し
た家一切は菩薩天人雜類の如し深著の如し深著の如し深著の如し深著の如し

をあげていふ奇な法きの純陀大い小福徳阿じゆんたの世尊せそん最後さいごに供養くやうを
うもはせぬふかざらふ大だい衆しゆみちるえやうしゆははらうけぬきとてうけさせ
めえん福徳ふくとくこ乃供具くぐむちき事ことをたのめと純陀じゆんたをまん讃さんめ
をあげて此時このときに世尊せそん衆しゆをまん讃さんめせんとおぼしめ身みれ毛もうれぬ
毎量ひりやうに佛ぶつをあまうのまけ佛ぶつにおおしく无量むりやうの比丘びくそ僧そうをまんぞうびおりま
して此この大だい舎しゃに教くわうかざらふ衆しゆに佛ぶつの神力しんりきに一切いっけつの大だい舎しゃにまんぞう
まうきし拍ぱくをうもめふし系けいに純陀じゆんた乃な持ちまゐる是こゝろはまんぞう成じやう熟じやくの食じきハ摩ま
伽陀かた國こくに八はつ解げをうたふれども佛ぶつの神力しんりきに一切いっけつの大だい舎しゃにまんぞう
阿あまの衆しゆ之これをまんぞうめし純陀じゆんた其その眷けん属じやくと共ともふいとて
かたしめなるまがら如來にがひをめぐらし焼やき香かう散さん舞まい心こゝろをまんぞうめしまんぞうて

去さるる時とき大地だいち六種りくしゆにふまひうごころぬ如來にがひにまんぞう入いれるをまんぞう相さう
ゆぞおりま次つぎこれゆのりてもろくは天てん衆しゆ八部はつぶ人にんも衆しゆ人にんも身みの毛け
たち又また衆しゆをまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて如來にがひにまんぞうにまんぞう
おりま守まもりやうめをまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて
まの九く夫ふ天てん人にんもまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて
おん心こゝろをまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて
まのまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて
世尊せそん大だい衆しゆにまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうてまんぞうめしまんぞうて

汝等當開意 不應大愁苦 諸佛法皆令 是故當默然
樂不放逸行 守心正憶念 遠離諸非法 慰意受歡樂

長河合流等にもよるふ乃時小世多物尸那城本生は女羅雙
樹に間おつしほし背痛せはあふとて阿難者者をやしておま
しをさるるをいし座をかまにせはさるる世尊はみびの僧伽梨
を四ふたみ布袴とて右に布を申のにはを布面あにむ
ひ獅子王はごころの布ををさるるにぬはせあふこれ時雙樹に間
に神あり時花を地すき敷じて供養す迦葉菩薩摩訶
すみて白の世尊をすてに一切病をまぬれあふ一切病を
貪欲瞋恚愚癡憍慢あれもあふ病阿世多なるふび病
苦をぬれあふまはは何れもあてあ文殊師利等に属して大衆の
為ふ法をとりけりてあふ黙然空してふせの如來実病あ

一はたはいななるは病阿世多とてあふて甚深は大衆強典を
あせのそは如來何由急に毎量は方便をえて大迦葉等阿
漢にをて諸天衆も人衆も阿釋多羅三藐三菩提を志す
うははらうに志すは又何れゆゑあふの悪比丘を治し
あは世々実あまひおらまはるるをいひぬれ黙然とてふ
はま守九十六種は道に妙門瞿曇每著にうははあど輕
慢せし如來世はうなまき他人めおそれ給ふことおらま
あは今何れ申あふの右脇あうおらまはてんをうけうあふに
志すせのあふを法しては法をとりせあふことあを
しあはるるをせること乃信をうせせあふ又えよあ大慈惠心あ

此の世のおろく念ずる處を志す一知一それ小随順して利益せん
坐敷座一やがて教を以て結跏趺坐一の法を以てしてはるるま
ま法やうあるははるる大光の法をたもつるにあらんやんといふ
さかん中々百子れ日のひかりにあらんやん由十方諸佛が
世界を照し一を以て此の奇蹟をあらう一とて迦葉菩薩文殊師
利大菩薩阿若橋陳如などの大がさの大夢聞甚深微妙法
をとりまかりまばらまきにあらうてあらうの小説をあらうて
にまうて集社系人此の法をうむるの聖果不取が阿耨多羅
三藐三菩提のころをとおす今あらう佛法を慢たふ大外道も
罪をあらうて解脱をあらうて教をあらうておまひたらうとてあらう

諸天世尊にあらうてあらうてあらうてあらうてあらうてあらうて
あらうてあらうて世尊涅槃の後をあらうてあらうてあらうてあらう
今あらうて後毛比丘比丘尼をあらうてあらうて三皈依をうむる者も佛の弟子
形れはあらうて世尊の遺法は弟子を守護せらるる一とてあらうてあらう
けられ本のあらうてあらうてあらうてあらうてあらうてあらうて
法乃ららにあらうてあらうてあらうてあらうてあらうてあらうて
此の神も今も世尊の遺教をあらうてあらうてあらうてあらうて
此護法は神乃志國を擁護せはるるあらうてあらうて法法國小生れ
出らるる難逢難値のおもひをあらうて解脱は法をあらうてあらうて
法をあらうて阿難尊者のあらうてあらうてあらうてあらうてあらうて

しめしめからあはれに阿難はいつとめと阿若橋陳如小とを
あふ橋陳如答て魔王世尊に化して阿難をいさなひし二百四
たふ侍ると白くあせをこれをもくせむひか乃魔を降くまん
もおほく文殊師利菩薩小甚深陀羅尼をいさなひかこれに
おとてお呪を説く下と勅し給ふ此時かこいさなひの四億
は魔阿のまうて種々に法を説く阿難をなほまじき阿文殊菩
薩佛勅をうき乃魔意中におけしほて告めず諸魔あき
かにきけ家世尊らあうけし神呪を説く阿とて乃陀羅尼
を説く阿諸魔これをもくして皆菩提心をおく魔業を捨て
阿難者者をたぢらむの文殊師利魔を降伏しをよふ阿難を

いざあひ世尊は阿もといつとめあうてあけ時須跋陀羅といか
道ありせんすて世に阿難者とはらかたなり阿難は
世尊阿難者者に化益は孫あはれを志後しめ徳度
あよと勅し阿難者者佛勅をうきおつとめあうてあめあは
須跋陀羅と世尊は世に出るひてあはれをとりせむひ人天を利益
せはあはれを志後しめ徳度し我慢ふひれ捨て
一まあふとあはれを志後しめ徳度し我慢ふひれ捨て
に阿難は阿の思とて阿難者者阿の思とて阿難者者阿の思とて
へはまうてはく大般涅槃をとりせむひあはれをとりせむひ
なうかあ音をとりて甚深微妙の思とて阿難者者阿の思とて

ぬきばさむかひなきかまう我見世山も一時にさげけは眼浄を
法を見佛ともきしよなるれはすまゆの邪見をすく佛の正
法誠愛護一深信堅固なり佛足を礼一出家一法才子也
たうんことばこいせ法世多るまの形く須跋陀羅善東比丘の佛
道に入と告させるふ此時須跋陀羅歡喜身も心も阿まうて
とらこびかきるま耶かみ記をたけつるは法家内身ふはきゆ
つとたうは信性智水心は深みそく二夜縛着れ一煩惱つき心
と巻て須僕の果にたげゆのふ聖果をたをたうのる教を阿ま
んせのゆきを礼一ひとふ右たうをぬきむるむを地ゆつけ長
跪合掌一心にむく世冠冠をさひ憶びうるみおもぐあうて

又白一も世さ家恨付るは久遠却れむくより常に事とわれを阿
ぶむはばどらう十無明邪見ふたのふ三界か道法れ中におほ
ま志む書をたあつこつたはばい今如来世恩をたうふりて正
法大悦び心にあまう信利世さ智意乃大海無量の所生我
容てあをれぬのふをみづから怒そふおまに累却身をもく
くとも世ささうの恩を報し世法にたうむくひつげけは
たよるま又白一まらるる家縁老解命のふたも信づいぬ
かえふ世ささうたうら涅槃一もて世におは一ほてあそ
まみ救護一もこれよとあうく信一かかふはあまのあまか
須跋陀羅はこらぬらうたあまのばらうんまうかひ一は苦ある

ある苦の海に此身を投じて、正意眼滅せんといひ夢を醒
げなき人なる身とすは血乃あせそ然れを法かたなきまて
世尊は法をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
なま心法をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
世尊は法をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
け杯毒の毒身を捨捨する唯福のまはせらる後より涅槃ありみ
ふぐ一やういひをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
河沙の大菩薩も比丘比丘尼も一切世間乃天人阿須羅もとも大
船の父をたばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
おんれなきまて依地なきまて

此のうれをばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
まは福の由來者なり一其もあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
一は佛に世尊は法をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
りままなきまて見は法をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
行苦生此大海の中なり一其もあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
ことなるれ三界に身をこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
ちたなきまて一其もあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
けらばなきまて一其もあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
て境界を縁し貪瞋癡を念くたまひ之生記た業をばあをこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて
却らうこのうに常に苦悩をこちなきたふれ國施もんせり一あり一がまて

ゆりららるゝ象曠劫より此方すでに諸有を断り金剛梵
藏常深家淨なり今難思議をあくる方便力を現し
大涅槃に入世法に同く衆生に此身はひるはごごとく
う形事ごとく成てしめ佛をあらわす心も起しむ事死
北かられ守みゆるる諸の輪轉は法をかたごとしは等しと免
精進し正智をもちてすみむるに諸有を知らざる者させ
るは又たすまふ此須跋陀羅を過去に起ししより恒河は佛を供
養しふまゝ善根をうへた力かて孝尼乾外道の中にあ
て出家し方便恵をもて邪見の衆生をいざなひすめて正智
にのまむ今須跋陀羅本教の乗じて家最後の涅槃あり

正法をきく阿耨漢果をなすなり又涅槃にのり象成道し
て阿若橋陳如を度し最後は説法し須跋陀羅を度し家
事究竟すもしむ事成すなり今に法をならん
とたたまひはごう歎しするふといひく須跋陀羅佛に恩を
報せる大衆その屍を供養し塔廟をたてよと勅し大衆
これおしめてたゞまをとおひせき法をうへふとて香木酥油
をもて佛の屍を茶毘火中より大光明をさるる諸の
阿耨漢たたり乃まに十八変は神変を現し又火中に
入る無量の大衆これを見て菩提心をおこし外道邪見は
たがひとも見ぬいまし此大衆悲感し舍利をさめたり後

塔をたてて供養せよ。乃時尔世者阿難者。若余の大願を
告はせる。言家滅度。尔後此とめて。第一大涅槃を護持し。修
ま無量万億阿僧祇劫。此れ修む。此大涅槃此法を修む。てい
ます。てい頭説す。此大涅槃はこれ十方三世諸佛。此金剛宝藏あり
第一系家法。まことかみして。この家こと。此れ一汝等決定を。てまこと
とに佛の恩を報じ。才み。やに善報を。得んと欲。次ま。諸佛摩
頂し。も。世々に生。佛。起。正念を。了。したる。は。十方諸佛。業に。を。乃
前に現し。と。佛。智。一切。悉。成。生。を。守。護。して。出。世。の。法。を。得。せし
め。る。よ。し。ま。ま。ば。つ。と。め。て。け。涅槃。此。みの。つ。ま。を。修。習。す。べし。と。を。し。ん
させ。る。ひ。も。阿。難。者。に。お。し。ま。い。を。し。ん。せ。る。と。し。ん。せ。る。は。

や。に。老。る。く。れ。釈。種。い。う。阿。そ。れ。と。お。ぼ。は。せ。る。涅槃。此。後。は。阿。難。者
者。よ。く。教。誡。し。妙。法。を。授。与。し。邪。法。不。入。の。事。な。む。と。た。ま。は。し
成。生。を。憐。愍。す。べし。一。般。の。い。と。初。ん。と。ん。に。遺。教。を。と。せ。る。ひ
て。此。ま。む。な。り。く。ま。は。後。へ。も。と。ま。か。ひ。な。り。ん。勤。て。お。こ。し。修。ま。す。と
ま。さ。は。信。説。せ。る。ひ。て。也。涅槃。時。の。示。教。の。事。お。し。ま。す。と
告。は。せ。る。よ。阿。難。者。此。法。を。護。持。す。け。め。り。修。し。て。出。ら。り
身。も。子。も。ひ。じ。な。り。ま。は。然。ら。ず。て。そ。の。お。ほ。え。る。を。此。世。の
前。に。た。れ。ぬ。一。死。に。た。ら。ぬ。に。お。し。ま。す。阿。那。律。者。こ。ま。を。ん
の。い。ひ。の。ま。ま。は。お。し。ま。す。お。し。ま。す。愁。は。れ。み。ま。の。如。來。此。涅槃。時
の。い。ひ。の。ま。ま。は。お。し。ま。す。お。し。ま。す。目。お。し。ま。す。ま。は。ん。心。を。し

めて先四向を啓一たまふといはれおどろり阿難者
此のよめにやしくはくしこれ覺え給ひて世尊に白し佛
槃此後六群比丘他家を汗さんめいつふてこれを治せん佛涅槃
後車匿比丘といふんぞ共小住して示教せん如來世小住してはせ
ば世尊を仰し世尊を涅槃此後何を仰し侍らんや今ほ
下ハ世尊に依て住し侍る哉涅槃乃後何ふらつて住し侍
らんや又如來滅後小法藏を結集し侍らんふ一切強んふ
あは何等此語をおき侍らんやとるく同様の世尊これをまじせ
るして又此の教示せよといふ家涅槃此後何を仰し侍らんや
教法より侍らざらん観六群車匿比丘小教示侍らんや

うらみ上果を説くといふ事やに告る不死ぬるなりて生死
小輪轉一又無明滅すれば三界すて法之住因縁をとりせよ
此三界つまたる哉出世人とおはす之を脱せよ又佛滅後あは尸
羅の戒を師とせよあ乃依て住す侍らあ四念起ふよて住せよ一切
諸始めは如是家聞等乃語を安すべしとをうすせよ阿難者
者もあしく法心法をさめて侍後此事も細やうお問答あたまふ
又涅槃此後侍棺小をばるる事茶毗し身侍法を問ふ
まつるる人金輪聖王此法にまづとておしよてその作法舍利
法をまづ塔をたて供養し身侍る事起る起るをうしはせよ
そ侍る帝釈天王世尊涅槃せよ事あは侍身此舍利を家

小阿比羅の事あると云ふ事ありて其の事あるをゆゑとせむと云ふ事あり
此處生に平等に供養せむとせんや其の事ありて其の事ありて其の事あり
我を夢みる人まゝ天上にありて塔をたて供養せむと云ふ事あり
はせある人天大衆の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
佛涅槃すこと其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
舍利阿比羅供養次第ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
て三寶の日に世に住して世間乃為不歸依の處と云ふ事ありて其の事あり
あり又若ある人今涅槃の時ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
毎事等にうづりて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
こと形も坐すや三寶若ある人一切四處皆戒の三寶四諦

通達一と云ひたるは其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
うづりて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
して其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
坐すまひをうづりて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
手をうづりて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
金其身をうづりて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
乃其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり

ひるに何は世をえん事偉大なる念の三塗八難人天あり由
不煩惱四重五逆極惡北罪とがもくほろびて阿まめれぬを
解脱北果をなす世をえん事偉大なる念の三塗八難人天あり由
僧伽初出我輩北果をなす世をえん事偉大なる念の三塗八難人天あり由
さふ今時ふまると北のまめりて初禪入ゆるの^{しん}涅槃のひるを
をえてあまのく世界を觀し寂滅定に入せるは初禪より出
て弟三禪入る三禪より出でて弟三禪に入三禪より出でて弟四禪入
入四禪より出でて虚空入る入虚空より出でて无边識入る无边
識入るより出でて不用入る不用入るより出でて相入る相入る
入る相より出でて滅尽定入る滅尽定より出でてかたて入る

相に入らるるれとは手はじりて身は定むらうの^{せんぢやう}
かて初禪入るをえり又大衆は告はせぬ我甚深般若をも
て阿まのく三界一切六道北諸山大海合生を觀するに根本北
性離一畢竟寂滅入るて虚空相入る名なる識那之
形が之諸有を斷し本來平等入るて下北相あり見ゆ
覺智なる繫縛すむの^{しん}解脱すなうる^{しん}身生なる壽命
なく不生不起不尽不滅世間もあらず世間もあらず次
涅槃生死のみ不可なるの二際平等入るて諸法入るま
がゆゑに阿居靜住入るて捨す処なきを究竟安樂とす必
不可なるも元住北法よる法性施為す一切の相を斷しある由

法相なり是を志願故出世世人となすの志此こそを志すべし
 生死此始と形位之汝等大衆すまかみ死を断し生死此は
 一先を滅すべし坐かす者させるひ又禅小入超せさせたるふ
 初禅より五次未にすみて滅尽定小入滅尽定より出起
 飛く起此諸禅小入り入せるふかう明達小三夜禅小入超
 入ひもあくの禅定小入せるふこと二十七夜なるげ明達一及をさ
 入ふこと其深此法然とてそのふんまて阿難者者者悲
 哀憂愁の志のみの法然と後ほまてとて表出おほき
 多そはつていふ酒も多し法入なるふて田原も子おほく
 入るはつていふ酒も多し法入なるふて田原も子おほく

此の法相なり是を志願故出世世人となすの志此こそを志すべし
 生死此始と形位之汝等大衆すまかみ死を断し生死此は
 一先を滅すべし坐かす者させるひ又禅小入超せさせたるふ
 初禅より五次未にすみて滅尽定小入滅尽定より出起
 飛く起此諸禅小入り入せるふかう明達小三夜禅小入超
 入ひもあくの禅定小入せるふこと二十七夜なるげ明達一及をさ
 入ふこと其深此法然とてそのふんまて阿難者者者悲
 哀憂愁の志のみの法然と後ほまてとて表出おほき
 多そはつていふ酒も多し法入なるふて田原も子おほく
 入るはつていふ酒も多し法入なるふて田原も子おほく

のばあ乃安羅樹林西東北二雙たれはびてをと本とありあ
 南北二雙もあなうし由の上へいもあひてひと本をたつ事と
 老に如來をたはひし事その安羅樹のようきざりて花この
 もあひびやくとつ事ありしとたつてさうきつさう白き花
 花よりには由花がやうて枝も花も衆心之落やうくふれけ
 散て名妙なるちのめありとす十方無量此普佛世界一切
 大地山も川も大海もいといふうもあひていふいふは音をい
 一若を海のいといふせん響音大涅槃の山かたれやせのひきと
 一しをたれはみる真乃慈父を失ひてあの子とあはれ今この
 たまひあれをすまると世覺すべにたれはせのふる生れの罪若も

や夜ふたのれ生死大海正法を失ふべし何れありてうこれまぬ
 れん又衆生教処の天をさしあうたうとあまあまて福をたげ
 ようあなまといひにまきつたなきうあふ夢さあぐありけ時を月日
 花をうめあかたれたあまうあていと之はう大ぬる老物さびうて
 阿めはちもまたこの形は花をぬそあまら花物利天危大をに
 あいまで曼陀羅華等此天乃美天乃末梅檀を阿めあう世言
 のゆうし教一六元乃うふを教一供養一皆ら森林天王
 帝釈天王金毘羅神密迹力士佛母摩耶雙樹は神安羅園林
 乃神四天王物利天王跋摩天王兜率陀天王化自在天王他化自在
 天王おたかく偈頌をたらしてかたうひをたぐ微妙のたつ美天香を

此佛勅乃まくに告はせぬまらくの東羅城の人の氏子者
共に金棺を造ふ七宝の厳密の茶毗料微妙無價
の白髭千粒無數細軟の妙兜羅綿をまじり梅檀沉香など何
由に供養せしむるははみりしはた勝るま眞珠山なりや
に名由是を辨しむるは諸人のなすはたしむるは世尊に
所にまらき見ゆるはたしむるはたしむるはたしむるは
にまらき見ゆるはたしむるはたしむるはたしむるは
まらき見ゆるはたしむるはたしむるはたしむるは
に供養せしむるはたしむるはたしむるはたしむるは
おまらき見ゆるはたしむるはたしむるはたしむるは

めせの金棺に中し香油をまらき見ゆるはたしむるは
城の人がたしむるはたしむるはたしむるは
んとおまらき見ゆるはたしむるはたしむるは
ごりせのたしむるはたしむるはたしむるは
らびやとあびやたしむるはたしむるはたしむるは
兄孫いたしむるはたしむるはたしむるは
カチはたしむるはたしむるはたしむるは
城入るたしむるはたしむるはたしむるは
妙廣大のたしむるはたしむるはたしむるは
天乃青果をたしむるはたしむるはたしむるは

ちくして聖棺を供養し奉りぬる身は天竺の界天たるべし
 ありて空に形なく聖棺を供養し奉るべし阿那律者
 者は如来を棺殯し奉祭をていしを切利天小空に摩耶
 夫人の湯に身を濡すを告るべし摩耶の摩耶の摩耶
 かのりませるべし佛の心は天地ふとにうつりて他方此
 菩薩諸天まで毛髪まで集りて俱に相を此摩耶夫人
 大迦葉尊者など乃とて形をせぬことよれまはすの心はかき
 ありぬる心志を此わが心をせぬことよれまはすの心は
 きて世間眼をりしなる心志を此わが心をせぬことよれまはす
 此茶鬼は海に形らんといふや双樹はもとに下をたすまは

金棺をんまあるせむして更に又心起りしかなる世の市井
 人々各各法面ありて形をたすことよれまはすの心は
 佛前にすみぬる心頂礼しむして過去無量劫よりつひは母子と
 なりてて形をたすことよれまはすの心は佛前にすみぬる心
 ありて世の形をたすことよれまはすの心は佛前にすみぬる心
 せむして空に形なく聖棺を供養し奉るべし阿那律者
 者は如来を棺殯し奉祭をていしを切利天小空に摩耶
 夫人の湯に身を濡すを告るべし摩耶の摩耶の摩耶
 かのりませるべし佛の心は天地ふとにうつりて他方此
 菩薩諸天まで毛髪まで集りて俱に相を此摩耶夫人
 大迦葉尊者など乃とて形をせぬことよれまはすの心はかき
 ありぬる心志を此わが心をせぬことよれまはすの心は
 きて世間眼をりしなる心志を此わが心をせぬことよれまはす
 此茶鬼は海に形らんといふや双樹はもとに下をたすまは

釈天於神力によめて河を穿きて流しけふと於ん世尊
佛神力を以て金棺を免らるる世尊は獅子を以て窟を出る
奮迅のいまむひれやうに佛棺乃中より合掌して立せる佛身
拈毛乳より干此光のをもとをもちて佛の光乃中に子化
佛おろし佛次なる合掌して摩耶小むみ母被問訊し
此間浮提小下らせりは涅槃は諸行法余なるゆゆがと
あつせりふと形を告まるる世尊は阿難者此法何ゆ
をん世の形みごなぐ世尊小むみ母被問訊し摩耶丈
人乃下らせりは佛を後世に生じて孝養を以て
に答侍らんやと母の後世に不孝の生じて孝養を以て

せりんとて佛にて金棺より出させり合掌問訊して諸偈を
説せるは諸偈をよむるは是を佛臨涅槃母子相見強といふ
かえりてとて佛持せられよとて佛の佛棺をとめてもとれごと
久し世尊は摩耶丈人世尊涅槃佛ありし時又説せるは送經を
けりてすてはきよりの佛を阿難者にとていする世尊は
何ごも世尊をれお形しとてみおぼさるる如來遺勅して
法を君と大迦葉とに付属せしめしとて勅精進して佛を
しに佛復持し人天を利益せしめしとて茶毘をんて佛を
とて佛の宮にすまはせり世尊は佛の聖棺は佛
天と大衆は供養しとて人への心をなすらぬおれがけ

羅刹より虚空に坐らせり多層樹をりぬにぞおつ
す次此時帝釈天七宝に大なる四柱乃宝臺四面小微妙の
莊嚴阿の七宝の璣路をたれり系をりて佛に聖棺をおか
ひなり又その分ごと香花幡蓋などを供養し又微妙に音系
あんに起きて起るゆふ六天色界天などもおんやうに供養
し又拘尸城に人を聖棺のふりにたはせりせ孫を足なりとも
又なるやうな一ひ市前ふすみて供養以七宝真珠香花璣路
を敷し妙なる法雜珠雲にやうにたはせりびきり大なるおも大地に
もなるやうなをたぐうちおきし聖棺を供養し又金棺はそれよ
うに女羅林を出せりしを小系にて徐々として拘尸城に西門の
入せる寶臺の拘尸城は由侍士女无教は菩薩の聞天人大虎

虚空の地上下をみちりて如來大聖の冥棺にたぐひぬるや
まぐうちなるが心表ぬにあらぬをがみなりゆいたなきに
形をたがひて供養し又法よりほりたをなするを金に拘尸
城は一面縦廣四十八旬とありて右のまをたがうて右の拘尸城を
七巾ぬるの孫ひるゆりて聖棺又城に西門とあり入せるふ其時一切乃
大虎微妙に香木梅檀沉水阿の由侍室香室幢幡蓋等を茶余
毘地処小供養し又法四天王とありておんやうの六虎天上上妙を梅
檀五百根は乃世界の香とありて似るゆりてを茶余此処
小供養し又その天也つ子根亦三の天也二千根亦四此天也

三千根牙五枝天者各四千根牙の天は乃く天子なるを無
色界に諸天をたゞ香花をとりて茶毘処なりおりしは供養
しめ阿那律尊者は天と人に妙香木六子根をこみ茶毘乃
処に供養しめむの世尊成道の時恒河北岸に梅檀一七堂
生出けるがけまうたられほりふとまことと車輪のごとくさ
七多羅樹むりのにぞちまを侍自以世界を薫ト如来を供養
しめ此に此樹の神本と共小生り常に此香をとめて世尊に供
養し奉志の世尊涅槃のらせ給はば檀樹をれ枝葉のみを
諸樹神も神まぬ餘は神の香樹をとめて茶毘処におりし
供養し侍侍茶毘処は過去乃諸佛出茶毘此とこりて

古に諸佛乃宝塔とて河内金剛不壞堅固たところなれば今の世尊
も佛本教力ふらりありて茶毘し奉事に於んち重んじ如
來大聖の宝棺をいかに空けせばさる茶毘の急におりしは
七宝の床乃上にとりまの床乃床乃床乃無價の難縁を
もて莊嚴せり涅槃の今まをて七日を強にこれに城中
に菩薩多聞阿く由來天に諸人世尊に侍神カめてはとめ
飢渴の患形を食をおもふ心願し皆宝幢香花などをとて
佛棺におもふはめどなりて如来を祀るは
下らざる也又大凡微妙の香花幢幡天系を佛棺に供養し
身を以て細微乃白髣して扱く手を以て謹み教はる宝棺

どのゆめをたすけおしめしゆ床にたすきゆゆ最をおぐみゆめ
 ては又なきよ形は供養一奉呈微妙香水香泥をよてゆ
 えーよりゆ更まで終流遊るよあまじゆしゆめ又宝櫃をもきん権
 洗すきよなるたおとたふるゆ之表外一宝香を燻七宝花しちぼ花
 を敷一無數の宝花幢幡さぬりゆ大地お古みあらふもさあて
 供養一普済是より無數乃妙兜羅綿をよてゆえーより五
 品更までおとしゆみ洗く又普のゆ上を上妙无價花白鬘びやくぶ子稚ゆて
 次系にふるよゆまをききめ又皆白鬘ゆて手を洗くみだすきよけ
 まるせゆ宝櫃小をよめなきゆは純のごと香油をそぎきよて
 櫃びん類とら姑かこをよめなきゆたふかるさたぬるよへりよきり

をこぎゆぐふ二夜をもみゆゆゆとおもゆる形一花かのよもらく
 ぬきはうく心のひとゆもなく天地ごかるひの夢たみそあまひ
 ゐるねおにせんすたなふれぞとゆあかすよ老たゆ形そく普善ぼぜん幡
 蓋がい敷樂ぞくあをを供養一普済こそそ心ゆめゆ家さ紀ふ大たい座ざ
 集あめられるふ香かう末まつもとほけみれかせたゆの須弥ぶつ山さんかこゆとお
 小七せうしち座ざのゆめゆもさる箱はこのさ幡はたけ舞ま路ろ雲くもたやうにえにゆる
 くるゆめ乃香かう末まつのゆめゆあひらく供養一普済人夫大座たいざもさ
 聖櫃しょうぐいをゆもめ香かう播は上じやうにたすきゆゆ聖櫃しょうぐい不ふ花けゆさるゆ大
 座ざ七宝しちぼ香かう炬く花け車輪しゃりんのやうなるゆもさるゆもて茶毘ぢひ

諸天ノ所ナリ音系をばむはむらひらく大敬舞をにちままがふけ
 宝炬は火香標小ちのひきぬまばおまひは分れたちままのふきえぬ
 又大蔵宝炬は火をえれば海をたきぬまど皆おらひまの海神こそ
 をえまの海中は火をて茶毘一奉らんとて大宝炬をたきまうて来
 るど火又まきえぬかへ茶毘は火のまをば海はいと不思議な所
 大蔵のみ何れ油急とまおまひは分れたち大迦葉尊者五百は弟子
 多と共ぬ海にぞおりまは此尊者は物尸城より五十由旬むりあ
 ぬる所者園嶼山におりま身心寂然とて三昧入のひが
 たちまの所心はまき身心ぬまおと後き定をたて所覺
 才海に山地震動次於觀一えまの如來すでに涅槃にいらせまふいと

たう形をのせまひは弟子に告るの苦なるまの家佛大所殺涅槃
 槃にいらせぬをたぬ擔乃くも入せまふいときてかこにまう
 てたむ毛一茶毘一茶毘二夜世尊は三十二相八十種好
 正真淨の身身をえ奉らざらんとしてそまふいと佛を教ひ
 めふりよまをを死ねりまはは弟子と共ふかちとままう
 であふいとせまふいと七日を履て物拘尸城におりせまは城は東は海路
 小ひのれは婆羅門の天をたて海河の尊者えのまいて君はれまおら
 々も也空とまをのへて佛殺涅槃一まふまをて茶毘の処ま
 うでらにまあぬといふ其まをはいらな海花ぞと留るへまこれ茶
 毘の処てはたあまを答ふとまひはれと家におりて六親ま志

め一供養せしむるは志ある事とてまゐるにせ給ばからざるは頂上
小法也といふべきは志あるは物もおぼえしむるをてよるまじくは
てかゝるべきをて時つるまじくは茶毘一尊と又おわらわら
くすまさせの城は山門より入るふげ物に城は大迦葉尊者有
縁地なる事也城の中に供養せしむるをてよるまじくは白鬘子
張と死数の妙兜羅綿をほるひ又宝蓋香泥香水香油宝幢
播蓋音楽弦歌瑞路など敷きつるまじくは是をてよるまじくは
牙子と共に茶毘乃如おむつひすくみよか一と云は大辰形く帝釈
天王小宮よりいりて如来をほ供せりて如来を茶毘一尊の供せりて
帝釈各のふ辰志をてよるまじくは大迦葉おまうてよるまじくは

少くはよひをてよるまじくは大迦葉尊者の供せりてよるまじくは
のふ大辰是をてよるまじくは路を起しすく先せ給ばよるまじくは佛
をてよるまじくは一時お礼拜一尊の供せりて地おたよる
臥してよるまじくはよるまじくはよるまじくはよるまじくは
形より大辰お宮のふりよるまじくは大聖お金棺を起しよるまじくは
大辰佛涅槃後二十七日をてよるまじくはひらきよるまじくは
ら如来の身は金剛堅固常樂永浄なる徳香芬馥せりて
梅檀の山形やうにおほしませはいざよるまじくはよるまじくは
佛棺ちのうまゐるまじくは金棺おのうまゐるまじくは千張の白鬘兜羅
綿毛みるとよるまじくは紫磨金此身はよるまじくは

お好少老のたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
けりておたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
えのておたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
播蓋音楽などを供養し其の香泥香水を以て佛身ゆき
きりておたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
妙兜羅綿を以て佛身にまとい次小もとの兜羅綿を以て佛
綿の上にまとい又おたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
羅綿の上におたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
を以て棺門を以て七宝に綴路などを供養し莊嚴し奉
り佛太子と若く右繞七匝しおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
長跪合掌し奉

苦哉苦哉大聖尊

我今荼毒苦切心

佛に偈を説きておたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
輻輪相を現し迦葉に回示しおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
あまのひの十方一切の世界を照しおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
子輻輪相を礼しおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
たの佛足跡礼しおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ

如来究竟大悲身

平等慈光無二照

等無偈を説きておたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
乃雙足佛指小入受るおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ
廣大迦葉おたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬおたすくせぬ

ごとく燈るべきも油の流むをた拘尸城の力士四人身も路をたけ
 七宝に大宝炬をともしては燈りてまの茶毘一尊らんとて香
 標もともんとすれどもたもまことに火もさるぬ大迦葉若も大聖乃
 宝櫃いので三界の火をともて焼せらんに力に及ばずにあつたとす
 まど次に極大力士河のすて三十人みる七宝に大炬をともて
 持するも志ひて香標もたつとれとて火標もともてて香標を
 一を損せしむるに迦葉もさして制りて如来の宝櫃は人
 天阿の申儀炬火もやきせまなすにあつたもつらとて志ひて
 才儀ことおせそを若もこれあつたもて大危又救へく一時も礼拜
 一七市右めまのをもれど如来大慈に力心胃たつともつら火を

多ふ乃火櫃外にまき出ぬ茶毘一七日を極妙香標も
 焼せしむる大危此七日たつともかやびの影標にともれつら
 供養をたしめし世依その時四天王に親小香水をともて
 たり又須弥北四垂小四大香標もて甘乳を出し樹ありあま
 園をもて百由旬これ樹根の下の茶毘はたもつらでおれ香
 瓶をよみ樹のあり甘乳をみくも火をけし舍利たつともとら
 天宮にともて供養せんともつらとれとて乃火いともえ増やてま
 由縁のありしまきをもて大海の神河に神宝親小香水をとも
 きたり香標にあつた舍利たつともとめて任たつて供養一尊
 らんとて此時火つともつらとらあ所那律者若し香をともて

ておれく舍利をとりまのるめて供養せんといはれども是れ
 貪心なりあり舍利天上におきし海中におきし地居
 人ありありておれ供養しせらんやと告め由天王これをもて
 たまひ懺悔して天宮にかゝるれば海の神河の神もみ懺悔
 しておれ供養せしめその御まは其時帝釈天王七宝に親い移り
 供養此具をまうけ茶毘の処におきしはついで移しけし火おれづ
 らみなきをぬ帝釈すみ宝棺よりあつんとしるは那律者
 何ごとをなすやと問ふる世尊はきに家小 牙れ舍利を
 たねのまみはまきごとそ家まをぬれば茶毘おれづらき
 牙舍利を信しまの信託なりとせしむるに佛棺をまき上の領れ

牙舍利を納めしり天上より降をたて供養しめふるは
 此徒疾淫利阿多帝釈天の御しるふか之れ来りし一雙に佛牙の
 舍利をぬすむるぬすれども此中にも城内は士女等
 由依大蔵をそひりあり一時ぬ舍利をとりせらんとい阿那律者
 これを制しぬる志ぞとて之をもちて世尊に説のごとく安祥とて
 如法に若く分ちて供養すべしと告め此を制をまらひは
 釋弓箭など此我具をとりおろくおまきまふとてはそひり
 佛棺を死らまき身傍に纏綿白鬘をとりおろくおまきまふとてはそひり
 を見せりといはれしは深心おれ移し長跪合掌し
 如来以大自在 於一切世得自在 大悲本願處此土 周旋苦海度眾生

等持偈を説けりて後ト少少哀をばして供養一室にこれ
る阿那律尊者一切人天の爲に城内に於くと共小室に於て
おけしほしきまのまのまの白鬘兜羅綿をばしては迦葉
は白鬘之子張とて今一城内の人れ白鬘は一雙をばして
は灰とてなれ家兜羅綿を宛然とてとてとて阿那律
尊者白鬘兜羅綿を細くして大灰とて人鬘灰をとり
灰よりとりて余の燼灰をとりて灰のほをばしてとて
室塔をたてて供養一室に城内の人先より近をばして八の
金曇八世獅子座をばして七室に於てとて其曇おれく
斛をとりて獅子座の上にたてり座前をたてく三十二乃力士あり

おれく身に七室の璫珞雜珠をばして獅子座をばして
又座毎小身をばしてとて三十二人の妹女あり八人あり
はも持次乃八人あり七室をとりてとてとてとてとて
おれ次の八人あり宝劍をとりてとてとてとてとて
をとりて曇れ四面あり座ごとに五量に人教あり幢幡宝蓋
香璫珞をとりて妙音樂をとりて圍繞次又五量に人あり
牙粉鬘素長鉤などのありとてとてとてとてとて
拘尸城とて茶毘の処ありとて八乃獅子座何れ城を出て
城内に人教ありとて茶毘の処ありとて路をたてて香泥香水を地
ふりてとて路はとてとてとてとてとてとてとてとて

嚴を流る大聖世尊舍利をもちて座をたす獅子座
 を茶毘毘鉢持し深心礼拝し供養次世尊大慈力のゆゑ
 に金剛乃体をさへてついでに座をたす舍利と稱しまた四牙をたす
 もとす座にさめせらる大龍舍利をたてまつり又た座をたす
 の供養し坐阿那律尊者城内人とも共におもひてあつて舍利を
 とり獅子座の上なる塚中にたすめり舍利持し座をたす
 まは八乃金壇おみちぬけ時又大龍なる供養し坐家もたす
 お力士をばり免圍鏡の座獅子座舍利をたす城内の人とも共
 香泥の踏もたす免之の拘尸城にたす人天大龍哀號し供養した
 てまつ座に舍利を随送次舍利城内におほしはまはまの座にたす

道中にある一歩四兵軍座おごせおれく鐘をたす
 戦具をもち城をたすりまの儀をたす儀式をたせども
 ふにたすたか人の事抄掠せんをたせんとす
 五百大呪術の師あり難を遮せん多めに城に四門をたす
 此堂幢形どの莊嚴例おほし又塔に四維ふたの系維をた鬼が
 一に座阿の標式の高にたす又五百大呪術の師あり共
 小獅子座をたす天竺夜叉神鬼をたすおほし
 んをたすきりん為おほし七日たすにたすの國王もたす
 毘羅城王もたすの釈迦等は世尊に神力をたす
 せん入涅槃後日数をたすもたす三七日乃後けりたす

おどろかせりいひなれがかうとやう涅槃入せりいひせん世は人
とやうとやう志を思ひせりいひを分たらぬ家つはまのいひを
あそびいひけ家たらんと思はるやうに形なうせ給ひ愛とも現とも
たげりいひ礼ねぞいひとやうな何れともをともあはれいひをな
いそぎ物尸城おおもひこころかこにたげりいひまじりていひのやう城
かおは無數の兵打かともいひ城内あは四維に維毛の鬼が
しらけ藩阿のそけい宝幢幡蓋形どの在巖之塔に及ぶとも
あし市門を守りて大呪術師に世尊涅槃しりいひとやういひは涅槃
槃後とやう四七日茶鬼すてにをともせりいひやうて舍利をわら
せりいひありともあひいひ王冠をともいひいひは世尊の前身は眷屬

ちり佛神神力あはれりいひを今まて念するはせりいひ
せりいひ舍利を思ひせりいひ路をともいひせりいひとせりいひ呪師も其
るも思ひともいひ事たげりいひをともいひて入するは舍利は
獅子座におりいひ事を思ひするはせりいひ市たげりいひ先阿の給を
ねえく礼拝し七市先ぞりいひをともいひ衆小若て衆等如来は舍利一を
徳として供養しせりいひとせりいひ大座をともいひはまきりいひ
乃市すともいひ志をともいひせりいひ先にして小形いひはおりいひ
て舍利を分るはあはれく諸をともいひ釈種あはおりいひ
いひのいひせんともいひたげりいひと答りて王をけりいひ皆是を
すりいひまきりいひのいひたげりいひはあはれおりいひ

はまめて地小たられもめはめえにむらりませり一が形おびてあが
ら衆人おびりて強ひ世尊は女等をあそむるにさうしては涅槃一
のあつて世尊は家親種なり一が捨舍利をわくことばは女等た心
はよまひの形は正信なりとせまはひのいふくはみよるに
また舍利を社一七市者に免ふりをもとむるに志めなきなり
あふ形にけは房へあてたまふらせても若し後北を場ふんまことそ
一摩伽陀國に主阿闍世王は先に提婆達多たすめたよりの父王を
害し位小室するまはり一がみゆらあつてそ乃惡業をなす恨みあふ
まに由身にあき瘡生みぬられ又さう一まはるふちのまはる
世尊月愛はひらにたれ由身は瘡なり一愈ぬれは後さひのひ

て世尊は佛としてまうて哀を求め懺悔一あつて時世尊大怒其瘡
微ぬ乃法業をほごころ一まはこれをもて身の瘡をあふまそ
まはる極重た罪もすやふふんをたてと後さひのいふ
此は本國におけ一は涅槃乃こととを説きし世のそは説く
の後の惡業をえ佛涅槃に相なりとせまはひのそ乃中よめ
そ手拘尸城におほうごのふとや四七日をもぬ毘羅國阿勒伽王
毘羅國に不畏王遮加羅國王又師加那王波肩羅外道名王あど
あはみる三七日後ぬきこゆゆあも世尊は涅槃乃とせまは
一佛身をおどらるまのいふそ手拘尸城にまうて供養し
存し舍利を禮しまらるやたは後時かたは後を阿の侍妹肉の人

此答の言葉を又お給へことなるまは諸國共にお恨みありて
 不徳なるといふ言も志するまじやねぬ事と云ふまは其言の
 意をわきまにせしめあつては物尸城に使者をして舍利を
 せせて志あるまじとあつてとせしめしむるに答へて強
 をもちゆふは諸王におもひなせり世尊大慈父家界におは
 し給へば般涅槃の身心全身に舍利永劫此國におまじりて供養
 せしめ給へしむるに外邑の諸人におわたりて其言の意を
 して彼をなす言ふに諸王に使者はわきまをせしめしむるに國
 々四兵をとりて物尸城におまじりて又物尸城は四兵の敵ありて其言

中も何れも壯士男女にあらんか之を舍利を志し以て信を
 諸國におもひをまじりて身身を捨命をすしはとて舍利を
 せしめしむると言ふをわきまにせしめしむるに志すまじ
 合戦とまじりて城におはし七國乃大軍四方をこまじりて舍利
 をなす言ふせしめしむるに志すまじりて志すまじりて志す
 此言の意は信にても信にても信にても信にても信にても
 姓熾といふ信にても信にても信にても信にても信にても
 告てし城中に力士居たりは世尊の每量劫善を信し惡を
 修するに諸君も又あはし信の法を修し惡を信し惡を
 らふ言ふ今何れ心ぞ涅槃後舍利を信し其言を起して

阿闍世王は弟八分舍利を以て王舎城に造る塔をたてて供養す。其
如く舍利を以て造る塔をたてて供養す。其
國王大臣長者居士等皆ら由依大衆又出づる悲號し、ヒゲウあまにこれ
於て禮拜し去る。此涅槃の縁を異視多し、イセウカあまに先長阿
含ふるを以て余涅槃強又其後分ふる如く迦憍を造るべしと
きてあまにけしとて流し信ぜざる。祐律師此釈迦僧小涅槃乃縁
を以てしてけしとて祐以為雙樹八枝義各有明舍利八分此縁亦有
以會故蛇化之體或全或散用能留瑞於羣刹降福於人天不生
而假胎無形而委骨其示跡無教即不思議之事なり。

